

守屋靖代先生に敬意を表して

A Tribute to Professor Yasuyo Moriya

佐藤 豊 SATO, Yutaka

● 国際基督教大学
International Christian University

敬愛する守屋先生が2019年3月でご退職となるにあたり、今まで同僚として同じ部署で一緒にさせていただきまされたことに、心から感謝申し上げます。

守屋靖代先生のご専門は、英語学、英語史、英語教育等であり、言語教育メジャーの基礎科目である教授用言語学、そのArea Majorである英語史、言語教育のための英語学、言語教育のための英語文法I・II、英語史I・II、大学院では、古英語、中英語を、さらに、一般教育科目として英語の世界、世界の英語を担当なさいました。守屋先生のコースは学生に非常に人気が高く、多くの受講生がおり、また、卒論のアドバイザーもしばしば20名超えであったのは、そのコースの質の高さと先生の魅力を表していると思います。守屋先生がMajor Orientationにおいて、よく学生たちに、冗談で「私がゴルフを習うのなら、石川遼選手に習う。皆もそれぞれの領域についてはプロに習いたいでしょ」とおっしゃっていましたが、正に守屋先生は、英語学、英語史においてはその領域におけるプロであり、そのことを学生たちは見抜き受講生として、卒論のアドバイザーとして、集まったのだと思います。守屋先生の業績は、ここではとてもカバーすることはできませんが、ひつじ書房からHituzi Linguistics in Englishのシリーズとして出版なさった*Repetition, Regularity, Redundancy: Norms and Deviations of Middle English Alliterative Meter*、『ICUの英語教育—リベラル・アーツの理念のもとに』等の多数のご著書のほか、多くの論

文がございます。

守屋靖代先生を簡単に表現してみると、「日英語バイリンガリズムとキリスト教信仰におけるICU卒業生の模範 (role model)」ということになるのではないかと思います。守屋先生と私は、先生の高く評価され、尊敬すべき面を除いて（これらは私に欠けている点で）、意外に類似点があることを発見いたしました。似ているところは、ともにICUの学部生・比較文化博士前期課程の学生であった時期と、米国でのMA, PhDプログラムにいた時期、および働いた時期が非常に似ていることです。ご退職の年が明らかですので、年齢に関わる学部生の時期などについて書くことをお許しただけだと思いますので、年代的に記述しますと、守屋先生は、1972年4月にICUに入学なさり、76年に卒業、その後、1期生としてICU大学院比較文化研究科博士前期課程に進み、1978年に修士号を取得なさいました。学部時代は語学科所属で、比較文化では並木浩一先生のご指導のもと、「旧約聖書における視覚表現とその意味分野」について修士論文を書かれました。また、1983年にアメリカ合衆国オハイオ州に渡り、University of Cincinnatiに1985年に入学なさり、1986年に言語学でMA取得、1994年に英語学でPhDを取得なさいました。ちなみに、私は、1973年にICU社会科学学科に入学、1980年に3期生として比較文化で修士号取得、1985年からハワイ大学に留学し、1996年に日本語学でMA取得、1993年に言語学でPhD取得と重なっています。

守屋先生は、1990年に日本に戻り、ICUのELP (English Language Program) で英語教育に携わり、1997年から語学科(英語科)のファカルティとして勤務なさっていらっしゃいますが、私は1993年から北海道大学で留学生の日本語教育に当たり、ICUの語学科(日本語科)に採用されたのが1998年です。その後は同じような時間経過をたどり、2008年に学科制度が廃止されて、同じ言語教育メジャー(かつデパートメント)のメンバーとなりました。守屋先生は英語教育に関わり、英語学、英語文法を教えていらっしゃいましたが、私は日本語教育に関わり、日本語学、日本語文法を教えておりますところも、担当言語は異なりますが、よく似ているところかと思えます。語学科や言語教育メジャーでご一緒していたときには、いろいろなことでお話をお聞きすることができ、様々な面でお世話になりましたこと、本当にありがとうございます。その間は決して平たんな時間でもなく、バラ色の職場ということではなかったと思いますが、私としては守屋先生のような先輩同僚がいらっしゃることでどんなにか救われました。また、学科制度廃止直後およびご退職直前に、(最初は、言語教育デパートメントの、次には教育学・言語教育デパートメントの)デパ長をご担当くださりまして、ご尽力くださったことも本当にありがたく存じます。

守屋先生に、ICU生のころ、留学時代、ICUに教員として戻ってきたこと等についてお聞きしたところ、時間的な流れは似ているものの、私の場合とは異なり、ご自身の計画からこのように歩まれたというよりは、求められて、あるいは、状況から現在の道のりになったというように伺いました。少なくともご自身は今までの道のりをそのように捉えていらっしゃるのかも知れないと感じました。ICUを選んだ理由も、どちらかというところ、偶然ここに決まったというお答えでしたし、1期生としてICUの大学院比較文化に入られたのも、指導の先生方が望まれたからというようなことでした。院生のときに、キリスト教文化研究所に勤めていらした、現在の夫君に会われて、ご結婚なさり、その結果、オハイオに行き、大学院に通う

ことになり、また、ICUに教員として戻ったのも、ICUのELPからの要望であったということでした。先生は、そのように表現なさいましたが、英語および聖書に対する深いご関心があり、鋭い洞察力と探求心と、並大抵ではないご努力があったからこそ、育ち盛りの二人のお子様と夫君とともに、オハイオでの生活をしながら、学位を取得し、専任教員としてICUに戻るに至ったのだと思います。また、先生の研究およびお仕事が秀でていたからこそ、求められて今までのキャリアを築いてきたのは申すまでもないことだと思います。

守屋先生が入ったところのICUの1学年は200名ほどで、最後の学生運動がまだ残っていたころでした。新入生リトリートに学生運動にかかわっていたICUの上級生が来て、新入生から意見を求めたというように伺いましたが、私のころにはそのようなことはなく、そのころからICU生、そして、日本全国の大学生が非政治化の道を歩み始めたのだらうと思います。そのような時代的な背景の中で、ICUの理念は色々な形で学生たちに種を植え続け、それが大きく実った例が守屋先生のような卒業生なのではないかと思われるのです。

守屋先生は、すでにICUの専任職を離れた後のご研究の計画をしっかりとなさっていらっしゃり、ひつじ書房からの出版物をさらに展開されたものをご出版になり、その後の執筆計画もおありだということでした。おそらく、既にご退職になり長野で牧師をなさっている夫君の牧会を助けながら、執筆計画等を進めていらっしゃるのだらうと思われます。きっともう少し自由な形でこれからもご自分の将来を切り開いていらっしゃるかと存じます。